様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０４１４７

研究課題名（和文）アクティブ・ラーニング導入による教師の実践的専門性の質的変化の解明

研究課題名（英文）A Qualitative Study of Teachers' Practical Expertise in Active Learning

研究代表者
五十嵐　素子（IGARASHI, MOTOKO）

北海学園大学・法学部・教授

研究者番号：７０４１３２９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では（１）生徒の主体性がどのような学習環境のもとに発揮されるのか（２）生徒同士の対話がどのような相互行為上の資源に促され展開されていくのか、を分析しそれらの知見を踏まえ「アクティブ・ラーニング」が行われるにあたって（３）教師がどのような環境を整え、支援や介入をする必要があるのかを明らかにした。
　これらの成果は、研究代表者・分担者による個別の学会・論文の発表としてだけでなく、著作（五十嵐・平本・森・團・齊藤編『学びをみとる：エスノメソドロジー・会話分析による授業の分析』新曜社）においてまとめられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、生徒の主体性がどのような学習環境のもとに発揮されるのか、生徒同士の対話がどのような相互行為上の資源に促され展開されていくのか、を分析しそれらの知見を踏まえ「アクティブ・ラーニング」が行われるにあたって教師がどのような環境を整え、支援や介入をする必要があるのかを明らかにした点である。
　また、エスノメソドロジー・会話分析の手法を授業分析に用いる方法を示し、教師の授業改善に役立てることに貢献した点である。

研究成果の概要（英文）：　This study analyzed (1) under what kind of learning environments students can demonstrate autonomy, and (2) through what kind of interactional resources students' interactions are facilitated and developed. Based on these findings, the study clarified (3) what kind of environment, support, and interventions teachers need to create for "active learning" to take place.

　The results of this study were compiled not only in individual conference presentations and papers but also in a book titled "Seeing Learning: Analysis of Classroom Using Ethnomethodology/Conversation Analysis [Manabi o mitoru: esunomesodorojii/kaiwa bunseki ni yoru jugyoo no bunseki]," edited by Igarashi Motoko, Hiramoto Takeshi, Mori Ippei, Dan Yasuyuki, and Saito Kazutaka, and published by Shin-yo-sha.

研究分野：教育社会学

キーワード：教師の職能　授業実践　授業分析　アクティブ・ラーニング　エスノメソドロジー　会話分析　相互行為　学習環境

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）教育学においては、伝達型の授業・知識観から共同体における主体的な学びへの転換が佐伯胖氏、佐藤学氏などによって提唱されてきた。また、学習指導要領では「知識・技能の活用」や「言語活動の充実」が盛り込まれ、そうした学習活動の設計とその評価の仕方が教師にとっての課題となっていた。そしてこうした転換に即した教員の実践的専門性の向上が目指されていた。こうした動向を踏まえ、申請者は学校教育活動の詳細を明らかにし、そこでの学習経験や教授知識の質を実践内在的に捉えることができるという利点から、社会学の質的研究法である、エスノメソドロジー・会話分析の手法で授業研究を展開していくことが必要であると考えた。
（２）また、研究開始当初において学習指導要領の学習過程は「アクティブ・ラーニング」として改善されることが喫緊の課題となっていた。こうした教授方法の質的転換による影響や帰結を考えるにあたって「アクティブ・ラーニング」の主体的・対話的で協働的な学習の過程を明らかにし、教師の実践的専門性と生徒の社会化過程の質的な変化を捉える必要があると考えて、研究計画を作成した。

２．研究の目的
　生徒の「主体的・対話的で深い学び」を促す教育方法として「アクティブ・ラーニング」の導入が本格化している。この影響を考えるには、こうした学習活動の実際やそれが可能になる社会環境的条件、教師に求められる実践力の検討が必要であると考える。
　そこで本研究では、
　（１）生徒の主体性がどのような学習環境のもとに発揮されるのか
　（２）生徒同士の対話がどのような相互行為上の資源に促され展開されていくのかを分析し、それらの知見を踏まえ「アクティブ・ラーニング」が行われるにあたって
　（３）教師がどのような環境を整え、支援や介入をする必要があるのかを考察する。
　これらの考察を通じて、今後の教師に求められる職能の質を明らかにすることを本研究の目的とする。

３．研究の方法
　本研究は以下の方法で行われた。
（１）まず、分析対象であるアクティブ・ラーニングを含んだデータの抽出、整理及びデータセットの構築と先行研究等の収集を行った。具体的にはアクティブ・ラーニングに該当する、学習活動の抽出作業と実践形式の観点からの分類を行った。作業の効率性を高めるため、分担者らが既に収集したデータをなるべく利用し、利用にあたっては被調査校に再許諾をとった。データに不足がある場合には、新規調査やフォローアップ調査を計画・実施することにした。
（２）構築されたデータセットは、匿名性を確保するために、会話や相互行為の詳細についての転記の作業を行った。これと平行して先行研究の検討や研究会・学会等における情報収集と成果発表を行った。
（３）本研究では研究の効率化を図るため、分析の対象領域を（１）生徒の主体性がどのような学習環境のもとに発揮されるのか（２）生徒同士の対話がどのような相互行為上の資源に促され展開されていくのか（３）教師がどのような環境を整え、支援や介入をする必要があるのか、の３つに設定した。さらに分担者間で各領域の担当を調整しながら分析を進めた。また教職経験が長く、学習指導要領についての理解が深い分担者を加えることで、知見の妥当性を高めることにした。

４．研究成果
　本研究の成果は、（１）生徒の主体性がどのような学習環境のもとに発揮されるのか
　（２）生徒同士の対話がどのような相互行為上の資源に促され展開されていくのか、またそれらの知見を踏まえ「アクティブ・ラーニング」が行われるにあたって（３）教師がどのような環境を整え、支援や介入をする必要があるのかを明らかにしたことである。また、これらの考察を通じて、今後の教師に求められる職能の質を明らかにすることに貢献した。
　具体的には、期間中に代表者・分担者が個々に研究発表した成果が挙げられる。
また、それらと並行する形で、代表者・分担者が編著者となった書籍『学びをみとる：エスノメソドロジー・会話分析による授業分析』(新曜社)として成果がまとめられた。
　上記３つの成果は相互に関連しているが、特に（１）の成果は、２章「子どもたちの主体的な発言を引き出す：教師の発問構築技法と児童たちの発言機会」(森)、５章「ペアで学習活動する：修復・修正を通じた英文法の習得」(巽・五十嵐)、７章「教科を横断して活用する：身体動作を定式化してアドバイスする」(鈴木・五十嵐)である。
　（２）の成果は、４章「黒板を使って経験を再構成し共有する：振り返りにおける心情曲線の利用」(齊藤)とその前提的議論としての１章「授業会話を作り出す：『ガヤ』のコントロール」

(平本・五十嵐)と、６章「作品について語り合う・鑑賞する：生活科における子どもの世界」(團)である。

（３）の成果は、各章で教師の学習活動の計画・デザイン、活動中の援助・介入の作業に関係づけられて知見が示された。これらの知見からは、生徒の「主体性」の発揮に関わる相互行為の水準とその様相は複数ありえ、そこでの教師の支援や援助は、計画された学習活動における行為役割の配分とその円滑な実施と、授業会話の整序とそこへの生徒の参加機会の配分に焦点化していることが示唆された。これを実現するにあたり生徒側の相互行為能力の存在が必要となり、授業の進行中でも生徒への援助や介入が必要となることも示された。

こうした成果は、現在の授業実践に求められる教師の職能を明らかにするものであり、同書８章「授業を分析的に振り返り、考察を次の実践に生かす」(鈴木・齊藤・五十嵐)では、現場の実践に授業分析を生かす方法の提案も行った。

このような本課題の知見及び方法論の展開可能性が、エスノメソドロジー・会話分析研究会例会でも広く確認された(五十嵐:2024; 森:2024b)。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 齊藤和貴	４．巻 第5号No.2
２．論文標題 授業における話し手と聞き手の関係の整序の方法―話し合い場面の児童の自発的な発話の取り扱いに着目して―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	６．最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森一平	４．巻 第86巻(1号)
２．論文標題 一斉授業会話における修復の組織再考	５．発行年 2019年
３．雑誌名 教育学研究	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.86.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 五十嵐　素子	４．巻 9
２．論文標題 「何をどう学ぶか」をデザインするためのエスノメソドロジー研究の視点 ：「対話的な学び」はいかに「立場の違い」を通じて生まれるのか	５．発行年 2017年
３．雑誌名 質的心理学フォーラム	６．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/shitsuforum.9.0_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 平本 毅・谷 美奈・川島 理恵	４．巻 9
２．論文標題 立場を異にする者同士のかかわりの質的記述	５．発行年 2017年
３．雑誌名 質的心理学フォーラム	６．最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/shitsuforum.10.0_92	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 森一平
2．発表標題 社会学的授業研究の課題とエビデンス
3．学会等名 日本教育社会学会第74回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 團 康晃
2．発表標題 子どもの遊びと学びをコロナ禍の下で考える ：相互行為とメディアの観点から
3．学会等名 日本子ども社会学会第27回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 齊藤 和貴
2．発表標題 教室の中のコミュニケーションの変容
3．学会等名 日本子ども社会学会第27回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 五十嵐素子
2．発表標題 今求められる学校と地域の連携
3．学会等名 第6回十勝社会教育入門研修会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Mizukawa Yoshifumi, Igarashi Motoko, Nakamura Kazuo
２．発表標題 Ordinary knowledge and scientific practice in elementary school scientific experience
３．学会等名 the 2020 Hawaii International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 五十嵐素子
２．発表標題 「何をどう学ぶか」をデザインするためのエスノメソドロジー研究の視点 ：「対話的な学び」はいかに「立場の違い」を通じて生まれるのか
３．学会等名 日本質的心理学会第14回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 齊藤和貴
２．発表標題 授業における話す－聞く関係の構築の方法－発言者の先行割り当てに着目して－
３．学会等名 第23回日本教師学学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計4件

１．著者名 五十嵐素子	４．発行年 2023年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 492
３．書名 エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック	

1．著者名 五十嵐素子	4．発行年 2023年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 352
3．書名 実践の論理を描く ： 相互行為のなかの知識・身体・こころ	

1．著者名 平本毅	4．発行年 2018年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 300
3．書名 第1章「会話分析の広がり」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編『会話分析の広がり』	

1．著者名 五十嵐素子	4．発行年 2019年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 -
3．書名 第18章「教育と会話分析」山崎敬一ほか（編）『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	平本　毅 (Hiramoto Takeshi) (30469184)	京都府立大学・農学食科学部・准教授 (24302)	
研究分担者	森　一平 (Mori Ippei) (90600867)	帝京大学・教育学部・准教授 (32643)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	團　康晃 (Dan Yasuaki) (90800962)	大阪経済大学・情報社会学部・准教授 (34404)	
研究分担者	齊藤　和貴 (Saito Kazutaka) (80911825)	京都女子大学・発達教育学部・准教授 (34305)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関